

中京大学チャレンジ奨励金 最終報告書

2021年2月9日

学科・学年 経営学部経営学科2年

氏名 水谷恩漱

1. プロジェクト名

As One

2. 活動期間

2020年7月30日～2021年1月30日

3. 活動場所(主だった住所・施設名)

自宅、JA西三河、JA愛知北、南宮農センター

◆プロジェクトの当初予定していた活動内容

学生がSDGsに関わるような活動の促進と体制の確立。一つの例として、大学と役所、役所周辺の地域が連携をとることで、ゼミとは違って学生が自由に主体となって地域の問題に取り組み、地域貢献をしていく体制を強化すること。

※SDGsの項目の一つである8.9の、「地方の文化振興・産品販促につながる持続可能な観光業の促進」や、11.aの「地域規模の開発計画の強化を通じて経済、社会、環境という面における都市部、都市部及び農村部間の良好な繋がりを支援」を目的とする。

◆中間報告時に抱えていた課題への対応結果

当初予定していた計画では他の役所や大学との交渉が困難であったため、内容を変更した。その内容が、学内のペットボトルなどの利用を減らし、学内のプラスチック製品の回収率を上げることで自然環境にやさしい大学環境づくりである。大学生協に相談をするも、ごみの処分やその後の利用の現状を知り、不可能であるため計画を再び変更した。

次の企画の内容が、非正規品の農作物の利用問題とスポーツを通じた子供の野菜嫌いのイメージの払拭である。愛知県内の全JAの支店に連絡したところ、JA西三河やJA愛知北が相談にのってくださるも、農家の方の、非正規品の農作物を消費者に届けることへの抵抗や非正規品の農作物の安全性、企画のメリットと農家の要望の祖語などの問題によって、企画の実行が困難となった。

その結果、そのJAの方たちとの交渉は諦め、サッカーのコーチで知り合いのいる静岡県浜松市のJAに企画を相談。若者を対象とした農作業の手伝いの促進やその地域での作物のPRという点で、互いの需給が一致した。そのため、既存のイベントへの参加や学生や農家、その地域の若者の多世代間でその地域の未来や農業に関する問題に話し合い、協力して企画をするという計画を考案(コロナのため参加できず、5月、6月、10月に参加予定)。

以上の問題改善のために、できることとできないことを状況に応じて捉え、相手にとってメリットがあることを提案できるように企画を変更した。

◆プロジェクトの目標達成度合い（活動内容や到達レベル等を具体的に記入してください。成果物があれば、添付してください。）

目標

・浜松市の南営農センター主催の農業イベント（地元の小学生や高校生が農業の手伝いをする主旨）に参加し、農業問題や地域の未来に関する議論とその解決のための企画の実行

達成状況

- ・南営農センター主催の農業イベントに参加と議論の実施の交渉は成立。
- ・コロナのため、第一回目（2月14日）は参加不可能（5月、6月、10月に参加予定）。
- ・学生の参加者数が不十分（大学内での募集やボランティアサークルへの交渉などができていない）。
- ・その地域の地元の学生の参加未定（コロナもあるため、多世代間での議論が不可能）。
- ・継続的な活動への発展が困難状況（特定の団体としての活動ではないため）。

自己評価による達成度 40 %

◆改善点、やり残したこと

- ・最初の企画の未達成
- ・既存のイベントの改善ではなく、新たなイベント自体を作る思考
- ・議論するテーマや参加する学生の人数などの具体的な内容の決定
- ・静岡県浜松市という遠い地域ではなく、名古屋市内での他の協力企業などの検討
- ・継続的な企画ではないこと（チャレンジ奨励金自体が4月から1月と限定的である為）
- ・豊田キャンパスの学生や学部との相談

◆今回のプロジェクトを実施したことにより、どのような気づきを得たか

（例えば、成果の活用・利用について、次回のプロジェクト活動に向けての抱負、卒業してからの展望等、自由に記入してください）

今回のプロジェクトで、2つのことに気づきました。

一つ目は、人を動かす大変さです。当初、自分の企画を論理的に説明ができれば、必ず企業の人たちは賛同してくれると楽観的に考えていました。しかし、役所やJAに電話で話しても、全く良い返事はなく、むしろ「興味がない」など、厳しい言葉ばかりで全く賛同してもらえませんでした。なぜ何のつながりもない中、一人で企画を始め、電話での営業や資料作り、内容の改善などを全て自分で計画し、一生懸命努力しているのにそのような結果になるのかと、思っている自分がいました。しかし、客観的な視点で捉えることで、自分は相手のメリットや自分の振る舞いや話し方、その内容などを真剣に考えていなかったのではないかと、努力している自分に酔っただけではないのかと思えるようになったのです。それを機に、相手が何を求めているのか、どのように話し方を変えるべきなのかを全て自分の一つ一つの失敗から考え直し、その実践と改善をその場その場で行いました。その結果、電話でのアポイントで3件の

企業と対面での交渉ができ、最終的には企画の賛同を貰えたのです。自ら態度を変え、自分が変わることで初めて相手が変わり、自分の本音をぶつけることで相手の心が動くのだと強く学びました。そして、人を動かすのがどれほど大変で、その過程が楽しいかを体験できました。

二つ目は、人のつながりの大切さです。企画の内容で紆余曲折する中、なんとか企画実施の決定まで到達できたのは、間違いなく人の繋がりがあったからです。自分の企画を進めていくうえで、協力してくれる企業を探しつつも、自分の繋がりをどのように活かしていくかを考えていました。私が少なからず人と繋がりを持っていたことによって、複数の企画の可能性が生まれ、その繋がりの先で繋がっている人と知り合うことで、さらに複数の企画の案が浮かんでいました。人と繋がっていることで、無限の可能性があるのだと気づきました。また、浜松のJA にたどり着いたのも、中京大学で出会った浜松市出身でサッカーをしていた友達の紹介で、浜松市に住むサッカーコーチと繋がり、一緒に農業の企画でコラボをしようということがきっかけでした。結果的に、サッカーでのコラボは実現しませんでした。JA と関係を持つことができ、企画の計画決定までは達成することができました。

自分一人では何もできず、とても非力な存在であることに気づきました。人の繋がりを持ち、繋がろうとすることで、自分のやりたいことや何かの可能性が生まれるので、今後もその今ある繋がりを大切にしたいです。

◆次回チャレンジしてみたいこと

次回チャレンジしてみたいことは、SDGs を目的とした活動を名古屋市規模で大学生が行う「SDGs 名古屋学生サミット」の開催です。当初計画していた大学と役所、地域が連携をとっての地域問題解決という企画が実現できる環境を手に入れたため、それを名古屋市規模で行うことが新たな目標となりました。残り 10 年を切った SDGs に、名古屋市内の大学や学生全体で取り組みたいと思いました。

現在、12 月末に立ち上がった、名古屋を盛り上げる名古屋市公認の学生団体「Maps」の代表を私は務めています。名古屋市公認ということもあり、名古屋市役所に企画の提案や企業に対して容易に提案ができるような環境にあります。12 月末に立ち上がったばかりであるため、大きな実績や活動はまだ行えておりません。しかし、名古屋市との繋がりを活かして、当初企画していた大学と役所、地域という規模ではなく、各大学の代表者が 1 か所に集まって名古屋の未来について話し合い、全体で企画を事項していくより大きな構図を目指したいと思いました。より大きな組織や会議を自分で作ってまとめる経験をすることで、将来社会人として働くときに、事業や組織をまとめられるような人間になりたいです。

このように思えたのは、このチャレンジ奨励金で行動することの大切さや社会について学べたからだと確信しています。このチャレンジ奨励金でできたことやできなかったことを踏まえて、交換留学で海外に渡る前に、引き続き多くのことに挑戦をしていきたいです。

◆チャレンジ奨励金制度を活用したい学生へのアドバイス

このチャレンジ奨励金では、自分自身のやりたいことに挑戦でき、自分の良い点と悪い点をはっきりと分かります。チャレンジ奨励金で壮大なことはできないでしょう。しかし、「自分」を変えるにはもってこいの企画だと僕は思います。大学の力を借りて、自分自身で何かを変えたい、挑戦したいという人はその挑戦をし、大きなことを成し遂げる一歩の手段として、チャレンジ奨励金をぜひ活用してください。

◆実施結果（成果）

※必要に応じて写真・現物添付可。枠欄が足りなければ、追加してご記入ください。